

Title	フリーダ・ウンダーリッヒの労働生産力論
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.5 (1941. 5) ,p.679(135)- 697(153)
JaLC DOI	10.14991/001.19410501-0134
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410501-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フリーダ・ウンダーリッヒの労働生産力論

藤林敬三

内 容

- 一、生産的社會政策論の發展と労働科學の成立
- 二、ウンダーリッヒの労働生産力論の概要
- 三、ウンダーリッヒに於ける労働科學的研究の要求とその評價

私は先きに、凡そ十九世紀の中葉以後、ブラッセー、レイ、シェーンホーフ、プレントノー、シュルツェルゲ、
ーファーニッツ、ヘルクナー、フォン・ブッフ、アッペ等に依つて、高賃銀並に短労働時間が労働の生産性を増大し、
これ等の労働条件のある程度の改善が、必ずしも従前に較べて生産額を減少せず、また労働費を高めるものでない
ことが主張せられ、そしてこのやうな事實の存する國に於いて、却つて貨物の生産費は安く、その對外的な競争能
力はそれだけ大であり、従つてまたこのことが一國の經濟的な發展と重要な關聯を持つてゐることが主張せられて
ゐることを指摘した。そして同時に彼等のこのやうな主張が大體、労働諸条件の改善の、労働者に及ぼす肉體的並

に精神的影響の認識、謂はゞ労働科學的認識に基づいてゐたことを、特に問題として明かにして置いた(註一)。し
かも彼等のこのやうな見解が、多くの實際上の經驗に依つて支へられてゐたことも亦、附言して置かねばならない。
其處で吾々は大體、十九世紀中葉以後、約半世紀の間に、社會政策的實踐が労働科學的認識を呼び起したといふこと
が出来たであらう。そして社會政策がこのやうな労働科學的認識と結びつくことに依つて、もはや必ずしも人間に
關する倫理的な要請に基礎づけられる必要も少くなり、それは生産的社會政策であり、生産政策であり、經濟政策
の一分岐を構成するものであると、いふやうに考へられるやうになるのも寧ろ當然である。

かくてこのやうな生産的社會政策論の後を享けて、一九〇七年秋にはドイツの社會政策學會が、アルフレッド・ウ
ーバーの提案に従つて、大規模の工業經營が労働者の知的並に心理的諸性質に對してなす要求を確證し、これと
同時に労働者自身の人格が現代の工場組織の特質に依つて蒙る諸變化を出来るだけ探求することを決定し、聽て若
干の人々に依つて各種工業部門に於ける、労働者の生活調査を開始せられた。この社會政策學會の調査は、一面大
工業が労働者の運命に如何なる影響を及ぼすかを明かにしようとする點に於いて、確かに社會政策に附着せる倫理
的、社會的要請の片鱗を示してはゐるが、同時に他面では大工業の労働者に對する生産的要求を探知しようとして
ゐることを見逃し得ない。しかもこの調査に對して指導的な見解を披瀝してゐるマックス・ウェーバーのいふ所に
依れば、「現代の(特に大工業の)労働の一切の社會科學的問題に對しては、原則として(具體的労働の)能率の生理學
的並に心理學的諸條件が、その考察の出發點を構成すべきものであらう」と考へられてゐる(註二)。かくてこの勞
働者の生活調査に於いて、ドイツの社會政策論者が一般に、尙ほ一面では人間に對する倫理的な要請を示しつつ、し
かも他面では彼等は労働科學的認識をその生産的意味に於いて把へようとするといつていふであらう。そし

てこのことは先きの生産的社會政策論に引き續く發展の當然の傾向であるといつてもいい。そしてまたこの社會政策學會の調査と殆んど時を同じくして、ゴールドシャイドの人間經濟學が誕生してゐるのも、別に不思議ではない。即ち、彼の人間經濟學は労働科學的認識に基礎づけられ、社會政策は労働者の肉體並に精神に重要な影響を持つものとして、労働の生産性の増大に役立ち、従つて眞の社會政策は生産政策である、と見られてゐることに就いては、既に私の述べた所である(註三)。

以上の如く、社會政策論者に依つて、労働科學的認識が生産的意味に於いて把へられて來たと同じ時代に、他方に於いては、社會衛生學、労働生理學、労働者心理學、テイラーの科學的管理法、ミンスターベルクの精神技術學等が、別々に現實労働の生産性の増大の問題に結びついて、發展しつゝあつた。そしてこれ等の科學的努力は、その各々が、個別的な實踐科學として成立し、生長した。しかしこれ等の諸科學的認識は、その總てが現實の人間労働の生産性の増大を企圖し、若しくは少くともこのために役立つといふ點に於いて、また現實の人間自身が單なる生理的存在でもなければ、心理的存在でもなく、精神 \parallel 身體的に統一を保持する存在であるといふ點に於いて、總て何等かの形態に於いて綜合化せられる運命にあつたといつてもいい。そしてこの科學的綜合の形態に於いて、まれて來るものが、労働科學と呼ばれ得るものであるとすれば、此處に綜合化せられる右の個別的諸科學的研究の發展と殆んど並行して、しかもこれ等の方面からは未だ労働科學的綜合が自覺せられないでゐた時代に、既に社會政策論者の見解の裡に、この綜合科學としての労働科學の存在が豫示せられてゐたと見ることも出來よう。この意味に於いて、私は後の労働科學の生誕のために、先きに擧げた社會政策論者達の貢獻を見逃し得ない、と考へたい。勿論、労働科學的認識の未發達の狀態を反映して、彼等のこの貢獻は決して過大に評價されてはならない。即ち、

彼等の見解に於いては、人間が常に精神 \parallel 身體的存在であることが認められてゐながら、尙ほ其處では人間機械間が題とせられたり(シェーンホッフ、ゴールドシャイド)、或はまた反對に、労働及び労働者に關する心理學的研究が特に重視されてゐたり(社會政策學會の調査、これと關聯するアルフレッド・ウェーバー及びヘルクナーの見解)して、彼等自身の見解に於いては、未だ明瞭な形態に於いて、労働科學の存在が自覺されてゐたとはいへない。しかし彼等の科學的關心は、總じていへば、私が右に引用して置いたマックス・ウェーバーの所言に依つて、よりよく表明せられてゐると見ていいであらう。

このやうに、實際の社會政策と社會政策論者を生みの親として世に出されようとする労働科學は、先きの歐洲大戰の勃發のために、却つて生れ出ようとする基礎をより強く與へられた。戦争は一方では、交戦諸國に於ける生理學者と心理學者の、實際作業(特に軍事的作業)の能率化のための、色々な方面の研究を刺戟したと同時に、他方英國に於いては、「軍需品工業労働者保健調査委員會」の成立に依つて(一九一五年)、實際の工業労働に關する生理學的、心理學的研究が、協働の形態に於いて行はれた。そしてこの委員會は戦後同國に於ける「産業疲勞調査局」——一九二九年以後「産業保健調査局」と改稱せられてゐる——の成立に、發展的に解消した。そして戦時中に發生したこの英國に於ける研究の本來意圖した所は、戦時經濟の要請に基づく軍需工業労働の激化に依る、労働者の保健上の障害を確認しようとする點にあつたが、それが同時に時局的に要求せられた労働條件の悪化が、却つて生産能率の低下を伴つてゐることをも明かにした點に於いて、吾々がこの生理學的、心理學的研究の意義を求めることが出來、従つてそれは特に記憶せらるべき大きな價值を持つものであつた。いひ換へれば、英國に於けるこの研究は、労働力の保持増強といふ點に關して、何人もこれを考慮すべきものであることを、現實労働の個別的な研究に於いて

て示し得た所に、大きな価値を持つといつてよい。

かくて、戦前に於いて既に社會政策論の體内に胎生した労働科學は、戦時中に於いて、またこれに引き續いて戦後に於いて、無視すべからざる重要さを獲得した現實労働の生理學的、心理學的研究の發展に依つて、漸く世に生み出される可能性を益々強く與へられたと見てよい。そして事實労働科學に一つの科學的な形態を與へて、これを世に送り出したものは、ドイツの應用心理學者であつたオット・リップマンであつて、それは今から約十五年前、一九二四―二六年の頃であつた(註四)。かく労働科學は結局リップマンのやうな應用心理學者に依つて世に出されたが、彼のこの努力は、彼以前の若干の社會政策論者の見解中に於ける、労働科學の豫示なくしては、全く不可能であつたなどとは、むしろ何人もこれを斷言し得ないにしても、其處に重要な運りがあり、結局労働科學の成立にまで至る一貫した一つの發展傾向のあつたことだけは、これを否定し得ないであらう。そしてこの労働科學の成立への發展傾向が、社會生活の現實的基礎に於いても亦學問的にも、當時、即ち、一九二〇年代の中頃に最も強かつたと見られる理由は充分ある。即ち、一方産業界に於いては、所謂産業合理化が強且つ廣く呼ばれ、この内に労働の合理化が最も大きな問題として浮び出て居り、これを個々の具體的な場合について解決すべき科學的方法の發見のために、心理學者も亦生理學者も甚だ熱心に、現實労働の實踐科學的研究に従事してゐたし、他方では、この労働合理化の問題に對して、色々な人々に依つて、色々な學問的形態に於いて、労働科學が事實問題とされてゐた。そしてそれは單にリップマン一人に限らなかつたのであるが(註五)、しかし私は、労働科學がリップマンに依つて最も優れた學問的形態を與へられてゐると考へると同時に、彼の労働科學が右のやうな時代的な氛圍氣の内に生れ出て來たことを、特に當然であつたと考へたい。

労働科學はかくて應用心理學者であつたりリップマンの手に於いて成立した。しかしこの労働科學の成立には、既に彼以前の生産的社會政策論の見解が重要な關聯を持つてゐることを否定し得ないし、またむしろその學問的な性質からいつて、單に應用心理學的研究だけではなく、生理學的研究及び衛生學的研究が此處に密接な關係を持つてゐることはいふまでもない。このやうに考へれば、労働科學は社會政策論者と心理學者及び醫學者の共同所産であるといふことも出来るし、またこのやうに考へることを、學問の性質上、リップマンに依つて與へられた労働科學を、今後よりよく發展せしめ得る所以でもある。私は凡そこのやうな意味に於いて、此處にフリーダ・ウングーリッヒ女史の労働生産力論を顧慮して見たいと思ふ。

ウングーリッヒの労働生産力論は、彼女の「生産性論」(F. Wunderlich, Produktivität, 1926.)の一部分を構成してゐる。彼女のこの研究はリップマンの労働科學論の公表と全く時を同じくして公刊せられて居り、事實この研究に於いては、未だ彼女はリップマンの労働科學論の存在を知らないである。そして彼女の見解は、大體戦前の生産的社會政策論者の見解と同一系統に屬してゐると考へられるものであるが、しかも時代の相違は彼女の生産的社會政策論を基礎づける労働科學の見解に於いて、従前のものに比して彼女の見解をより進歩的なものたらしめてゐること、彼女の見解に於いては、先きのマックス・ウェバーの言葉が或る意味では確かによりよく踏襲せられ、それだけに、私の謂ふ社會政策論に於ける労働科學の豫示が、此處により明瞭に現はれてゐるといふ點に於いて、彼女の見解は吾々の考慮すべき第一の価値を持つてゐる。しかも彼女の場合に於けるこの労働科學の豫示は、全く時を同じくしてリップマンの労働科學論の出現を見たといふ運命に置かれてはゐるが、勿論リップマンの労働科學論は、その後彼に依つて修補せられた見解に就いて見ても(註六)、未だ充分完全なものであるとはいへないのであつて、

この労働科学の発展のために、今日尙ほ吾々は彼女の見解を二瞥する多少の価値を認め得る。

(註一) 拙稿 前世紀後半の高賃銀論 本誌 第三十四卷 第一號

拙稿 八時間労働論と労働時間最適限論の擧頭 本誌 第三十四卷 第五號

(註二) 拙著 經濟心理學 (昭和十年刊) 二六〇頁 以後參考

(註三) 拙稿 ユーロパシヤの『人間經濟學』に就いて 本誌前月號

(註四) リンマンが彼の労働科学論を最初の単行著作として刊行したのは、一九二六年の左の(1)であるが、左に(1)を示されてゐるやうに、労働科学に就いて彼が公表した最初の見解は、既に一九二四年に遡り得るやうである。尙ほ左に參考のため、この點に關する彼の文献を示して置かう。

- 1). Arbeitswissenschaft, in: Arbeit I, 1924.
 - 2). Die Faktoren der Leistung, in: Produktion I, 1925.
 - 3). Zur Methodik der Arbeitswissenschaft, in: Arbeit II, 1925.
 - 4). Wege der Produktionssteigerung, in: Betriebswiss. Rundschau II, 1925.
 - 5). Unfallursachen und Unfallbekämpfung, Sammlung und psychologische Diskussion der Forschungsergebnisse, mit einem Vorwort; Ueber den Inhalt der Arbeitswissenschaft, 1925
 - 6). Über Bedingungen und Nebenereignungen einer Vermehrung oder Verminderung der Produktion, in: soziale Praxis 35, 1926.
 - 7). Grundriss der Arbeitswissenschaft und Ergebnisse der arbeitswissenschaftlichen Statistik, 1926.
- (註五) 拙著 労働科学論 (現代經濟新書) 參考

(註六) Vgl. Lipmann, Lehrbuch der Arbeitswissenschaft, 1932

二

ウングーリッヒは生産諸力の問題に就いて次ぎのやうに考へてゐる。先づ此處に自然的諸要因が考へられるが、この諸要因は元來吾々に與へられたものであり、且つ狭い範圍に於いてのみ變化され得るに過ぎないものであつて、従つて生産諸力の問題に於いて、先づ重要なのは資本と労働である。しかもこの資本は潜在的な力を保持するに過ぎず、それは人間に依つて創り出され、また運用されねばならぬものであつて、それ故に生産要素としての労働に對照して觀れば、それは單に從屬的な役割を演じてゐるに過ぎない。かくて經濟的生産力として、根源的な重要性を持つものは唯だ人間の労働あるのみである(註七)。

ところで人間の労働力は、資本主義經濟の下に於いては商品であつて、他の生産手段と同様に取り扱はれて居り、機械に體現せられてゐる合理性の原則が人間にも適用せられようとしてゐる(テイラー)。しかしウングーリッヒが此處で特に力説する所に依れば、人間は決して機械ではなく、「彼の思考、感情、意欲が常に彼の作業活動の機械的な正確さを攪亂する。」従つて人間を機械的に利用しようとする、謂はゞ人間の物格化 Entpersönlichung は決してその目的に合致するものでない許りではなく、それは却つて人間の最高能率を可能ならしめる諸可能性、即ち「經驗、理性と人格」を無視するものとなる(註八)。そしてこのやうに、主觀的存在として考へられる人間を機械から區別すべき特質を、彼女はまた人間の意志とその創造力に求めてゐる。かくて「労働の創造的特質の裡に、最強の生産性要素が與へられてゐる。」この創造的労働こそ技術的、合理的理念を負ひ持ち、生産的な生産組織を維持し、更らにこれを發展せしめるものであつて、吾々は労働に於けるこの創造力の發展を充分配慮しなければならぬ(註九)。かく

て労働生産力の考察に於いて、彼女が最も重要視する所は、人間は單純に機械に比して考へらるべき存在ではなく、従つて吾々は常に先づ主觀的存在としての人間の労働力に就いて、充分考へて見なければならぬといふ點である。そしてこの點では確かに彼女の見解は、先きのシェーシホーフやゴールドシャイドが考へて居た人間機械觀を著しく補足し得てゐると見ていふ。

このやうに人間を嚴密に機械から區別することに依つて、同時に労働生産性増大のための吾々の配慮も亦、從來のものとは當然異らなければならぬ。かくてウンダーリッヒは次ぎの如くにいふ。

「生産力としての人間の労働は、二つの觀點から觀察せらるべきものである。第一に提起せらるべき問題は、人間の労働がどのやうに利用せられることに於いて最も生産的であるか、といふ點にあり、第二に問題は、如何にして労働を最も慎重に維持し、最もよく發展せしめ、また増大せしめ得るかの、方法を吟味することにある。この第二の問題は労働者自身に對して、またその他の人々に對しても同様に、研究されねばならないものであつて、それは人間經濟 *Menschenökonomie* の問題である。そしてこの問題は、職業的不能者として經濟生活の負擔となる人々の數を減少し、職業的能力者の生命を、現在及び將來に於いて、出来るだけ有効のものたらしめようとする要求の内に含まれる」(註一〇)。

右の第一の問題、即ち労働力の最も生産的な利用方法は、結局主觀的な存在としての人間の創造力、また一般に彼の特種能力を自由に發展せしめるやうに、企業組織の有機的全體の内に摩擦なく彼を地位せしめることにある。そしてこのために、ウンダーリッヒは凡そ次ぎの四つの問題を指摘してゐる(註一一)。即ち、

(1) 労働力の一般的な配置

(2) 労働力の適所への配置

(3) 作業教育

(4) 労働、作業諸条件の最適化

この内(1)は労働市場政策の問題であることはいふまでもないが、それはまた當然(2)の問題と結びついて、謂はゞ適材適所の理想を實現することに依つて、労働者各人の能力を充分に發揮せしむべき基礎を拓かねばならない。そして作業教育が更らにこの理想實現を促進するものでなければならぬのはむろんである。この三つの問題に對して、最後に、しかも最も微妙な問題として重要視せられてゐるのは(4)の問題である。蓋し労働者の主觀的狀態は一方では労働法の問題である労働条件の如何に依つて、また他方では經營組織上の問題である作業の諸条件の如何に依つて、共に著しく動搖するからである。一般に資本主義經濟の下に於いては、賃銀労働は必ずしも生産性の要求を充分満して居らず、従つて吾々に取つてはこの理由を明かにすることが必要であるが、ウンダーリッヒは此處に凡そ次ぎのやうな諸理由を指摘してゐる。(1)作業過程の機械化、(2)労働者の經營に於ける從屬性、(3)賃銀の低廉、(4)賃銀關係の持續と世襲、(5)生活力の早期低下(註一二)。これ等の事情は結合して、謂はゞ労働者の運命を決定し、これが労働者の主觀的狀態に反映されるのであるが、彼女はこれ等の理由の總てに就いて充分の考察を加へてゐる譯けではなく、その所論の主要部分は(1)及び(2)の點に關聯してゐる。そしてこれ等の點に關する彼女の所論を此處に繰返す程の必要はないので、簡單にいへば、それは労働に於ける主觀的態度の問題であつて、彼女の既に問題にせる労働喜悅の問題の延長でもある。

このやうにして、ウンダーリッヒは労働力の最も生産的な利用方法の問題の下に、専ら精神的存在としての人間

を取り擧げてゐるのであるが、人間は素より單なる精神的存在ではなく、また肉體的な存在でもある。其處で労働の生産性の問題は、更らにこの肉體的な一面に於いても亦、充分考究されなければならない。そしてこれが、先きに示して置いたやうに、彼女の第二の問題であるが、これは労働の生産力の維持及び増大の問題とせられてゐる。尙ほ彼女はこの問題を人間經濟の問題であるといつてゐるが、確かに此處にはゴルドシャイドの影響の存することを否定し得ない。それは兎も角、この第二の問題に於いては、人間は労働に於いて一定の力(エネルギー)を支出する、従つて此處では先づ、このエネルギーの支出と補供が問題であり、更らにこの人間經濟の一般の問題は先づ労働者自身に就いて考慮され、次いでその他の人々に就いても考慮されることが必要となる、と考へられてゐる。先づ労働者自身に關する人間經濟の立場からいへば、労働力「利用の最適經濟は、人間労働力の償却期間の最大可能の長期化と人體の最上の發展とが同時に存する場合に、實現せられる」(註一三)。此處でウングァーリツヒはゴルドシャイドと同様に、労働力の償却期間を重要な問題として取り擧げてゐるが、これを補ふ個々の問題として、彼女は労働能率と作業諸條件の關聯に就いて「むろん此處に労働力維持の重要問題が含まれてゐるのであるが——次ぎのやうな諸事象を重要視してゐる。即ち、疲勞、休養、練習、作業環境、それに賃銀の大小の影響。この最後の問題は労働者の休養生活——それはまた一面に於いては労働時間の長短と關係するが——特に労働力再生産のため、の營養の問題であつて、彼女は此處に前世紀以來の高賃銀論者の生産的社會政策論を大體是認してゐる。また右の疲勞以下作業環境に至る諸問題は、既にクレエペリンの作業曲線の研究に於いて理論的に取り擧げられ、マックス・ウエーバーの「産業労働の精神物理学に就いて」の見解の内に採用され、これに基づくベルナイス女史以下の社會政策學會の諸調査中に、現實労働に就いて明かにせられ、また英國の産業疲勞調査局の諸研究に見られる、作

業に關する精神技術學的諸問題である。エネルギー支出としての労働力利用の問題に關して、このやうに精神技術學的諸問題を考慮せる點に於いて、彼女は正にゴルドシャイドの人間經濟學の立場を一步押し進めてゐるといつてゐる。しかし勿論此處には兩者の間に時代的相違の存してゐることを認めて置かねばならない。

更らに、ウングァーリツヒは労働者以外の人々に關する人間經濟學の問題に關して、先づ一般に人口問題の生産的意義を指摘して次ぎの如く述べてゐる。即ち、「生産性の増大は沈滞せる人口増殖と一致せず、人口の増大こそ新しい労働力と企業心の源泉である。」そして人口の増加に就いては、出生數の過剰が同一なる場合には、出生並に死亡數の最小なる状態に於いて、經濟的には最も生産的なる形態が認められる。蓋し平均壽命の延長は労働能率の増大、死亡率の減少、經濟財と母性力に於ける不生産的出費の節約——これ等は他の人々の充分の保育のために利用し得られるものとなる——等の結果を齎すからである。また人口の質が當然問題とされねばならないが、それは生來素質、後天的諸能力の修得、科學と技術の發達状態の如何に應ずるものであると考へられてゐる(註一四)。

この一般人口問題の經濟的意義の外に、特定の人々に對する人間經濟學的考慮も亦重要である。それは先づ生産的不能者と不生産的人口の數を減少することに依つて、また彼等と共に労働能力に障害を蒙れるものに對する再教育を施すことに依つて達せられる。そしてこれ等の問題に於いては、社會衛生學的、倫理教育的、作業と體育訓練の色々な問題が、適當に考慮せられることが必要となる。

以上のやうに、労働生産性増大の問題を取り擧げて來ると、労働者に對する、また一般社會的、厚生政策 Wohlfahrtspolitik は當然生産的意義を有するものと考へられねばならない。そしてウングァーリツヒはこの點に就いて、凡そ次ぎのやうに考へてゐる。社會衛生學、社會政策、労働法上生産性増大の欠くべからざる前提であつて、この

生産的意味に於いて、吾々は厚生政策の一層の發展を期待しなければならない(註一五)。かくて彼女も亦社會政策を以つて生産政策であると考へる一人であつて、しかもこの生産政策としての社會政策、彼女の場合には寧ろ厚生政策と呼ばれてゐるものが(註一六)、精神^{II}身體的存在としての人間に關する労働科學的認識に依つて、基礎づけられると見做されてゐる點が、吾々に取つて興味のある點でなければならぬ。

(註七) F. Wunderlich, Produktivität, 1926, S. 300-301.

(註八) Ebenda, S. 301-304.

(註九) Ebenda, S. 304-306.

(註一〇) Ebenda, S. 304.

(註一一) Ebenda, S. 306.

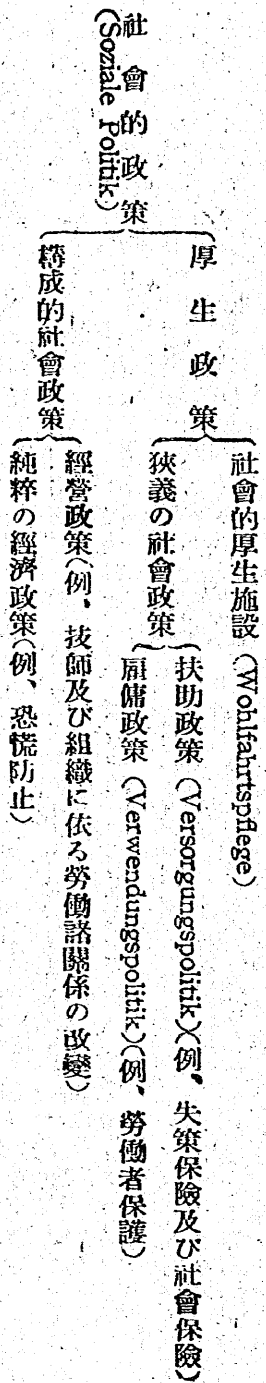
(註一二) Ebenda, S. 315.

(註一三) Ebenda, S. 326.

(註一四) Ebenda, S. 340.

(註一五) Ebenda, S. 346.

(註一六) 厚生政策並に社會政策に關するウンダーリッヒの考へ方は、參考のために示せば、次ぎのやうである。



右の社會的政策は労働の生産性の増大に役立つといふ意味で、生産政策であり、經濟政策の一分肢をなしてゐると考へられるが、尙ほウンダーリッヒは社會政策をこのやうに考へることに對して、此處に一つの保留を明かにしてゐる。彼女の考へる所に依ると、社會政策、特に扶助政策並に社會的厚生施設の如きは、經濟理念から離れても要請せられるものであつて、それ^{II}濟理念の上位にある人間の文化的價値に係らしめられる。そして特に、生産要素としての労働が人間の人格と不可分の關係にあり、しかもこの人格が經濟生活の内で緊縛せられて居る場合には、殊にこの意味の社會政策が必要とせられるといふ。従つてこのやうに考へられることからいへば、彼女の場合には社會政策は生産政策であるが、同時にそれ以外の何ものでもないとは考へられず、また別に超經濟的、文化的、社會的な政策としての意味を持つてゐる。そしてこの意味での社會政策が哲學的に基礎づけられねばならぬのはいふまでもない。(Produktivität, S. 347-349)尙ほこの點に就いては、次項に於いて多少觸れるつもりである。

三

以上概説したやうに、ウンダーリッヒの労働生産力論に於いては、精神^{II}身體的存在としての人間が最も明瞭に前提とせられてゐる。そして私が此處に最も明瞭にと形容する理由は、それが非常に優れてゐるといふことを必ずしも意味するのではなく、彼女以前の生産的社會政策論者達の前提とした人間觀に較べてのことである。この點に於いては確かに彼女以前の何人よりも、彼女の所論は先きに述べたマックス・ウェーバーの所言を、よりよく踏襲してゐるといつていい。しかしそれでも尙ほ彼女の見解には、不充分的點として見逃し得ない所はある。

ウンダーリッヒは労働に於ける人間を精神^{II}身體的存在として考察してはゐるが、この彼女の場合には、寧ろ人間が精神的、身體的な二面的存在として考へられてゐるに過ぎないのであつて、精神、身體の二面を含む全體的、

統一的存在としての人間の考察に於いては、彼女の見解には尙ほ甚だ欠ける所があるといはねばならない。従つてこのやうな所論からは、實際の労働者政策が未だ充分に意義づけられない。例へば、彼女は労働生産性増大の方策を、労働力の最も生産的な利用方法と生産性の維持増強策とに區別し、前者に於いては専ら精神的な存在としての人間を、そして後者に於いては肉體的な存在としての人間に就いて、考へようとしてゐるが、それは餘りに人為的な考慮たることを免れない。蓋しこの何れの場合に於いても、其處に考慮せられる諸事情はまた常に精神と身體の單に何れかの一面にのみ係はることではないからである。そして事實、彼女はその人間經濟學の問題に於いて、ある場合には道德の問題をも取り擧げるといふ矛盾した考察に陥つてゐるし(註一七)、また敢へていへば、彼女の人間經濟學はエネルギー保有者としての人間を主題としてゐるのであるが、此處に疲勞とか練習といふやうな現象が問題とせられて、精神的エネルギー論もないし、またこれ等の現象の主觀的な問題が充分取り扱はれないと、いふ缺點も示されてゐる。従つてこのやうに、二面的存在としての人間を考へることからは、精々ギーズの考へるやうな労働科學だけが豫想せられるに過ぎないのであつて(註一八)、この點では却つて彼女以前の生産的社會政策論者の或る者に於ける、統一的存在としての人間觀が、少くとも此處では稀薄になつてゐると見ていゝ。

このやうな難點があるにしても、ウングァーリッヒの所論に特徴的なのは、精神的な存在としての人間に對する彼女の考察である。この點に於いて、人間が機械と同一視せらるべきものでないことが、彼女に依つて甚だ強く主張せられてゐる。しかもこの主張は單に倫理的な要請としてではなく、少くともその労働生産力論に於いては、専ら生産的觀點からこれが主張せられてゐる。しかし既に本論前項の最後の註の内、私が述べて置いたやうに、彼女は社會政策が生産政策であると同時に、それ以上のものでもあると考へることに現はれてゐるやうに、確かにこの

ことは倫理的な要請をも含んでゐるといつていゝ。そしてこのやうな論調は、これより先きに、彼女がミュンスタールベルクの價值哲學とその精神技術學を批判してゐる場合に、最もよく現はれてゐる(註一九)。しかしこれは必ずしも彼女の所論の難すべき點ではない。何んとなれば、彼女の労働生産力論は、この人間に關する倫理的な要請のため、決して曖昧なものとはされてはゐないからである。そしてこれは恐らくゴールドシャイドの人間經濟學の立場の影響であらうとも考へられるが、しかも人間労働の問題に對して、彼女が倫理的な要請を依然として保留してゐる所に、社會政策思想の傳統の色調がある。

ウングァーリッヒの労働に於ける人間の考察に於いて、更らに一つの問題とすべき點は、社會的存在としての人間の考察である。確かに彼女の所論に於いては、例へば、經營に於ける從屬關係、賃銀労働關係の如き、社會的關係から精神的存在としての人間が問題とせられ、またその人間經濟學の問題に於いても、社會的諸事情が全然考慮外に置かれてゐるのではない。しかしこれ等の諸論だけでは未だ社會的存在としての人間を考察するのに充分であるとはいへない。彼女は嘗つてミュンスタールベルクに對する批判に於いて、次ぎのやうにいつてゐる。即ち、彼はその價值哲學に於いて、人間を以つて經濟に於ける社會的なものとして評價し得なかつたと同様に、その精神技術學に於いても亦、テイラーの人間機械觀に從つて、人間の機械觀に陥つてゐる。しかし「労働者の社會的環境は看過することを許されない。例へば、労働者はその家庭にあつては休息と充分の榮養を取ることが出來ず、絶へず生活の不安に脅かされて居り、大都市生活に依つてその神經が困憊されてゐる。「人間は吾々に取つては決して單なる心理的客體、意識内容の保持者とはなり得ない。人間は常に矢張り主體として、自我として、一定の態度を有する意識的精神として觀察されねばならない。尙ほ労働者は孤立してゐるのではなく、彼を特徴づける一つの關係に立つ

てあるものである」(註二〇)。このやうに、彼女は人間の考察に於いてその社會的環境の考慮の重要であることを力説してゐたのであるが、この所言から觀ると、彼女の労働生産力論に於ける人間考察に於いては、この社會的環境の考慮が甚だ不十分であるといつていい。

以上のやうに、ウングァーリッヒの所論に於いては、人間に對して精神と身體の二面的考察が殆んど無造作に行はれてゐたり、またその社會的環境が充分考究されてゐなかつたりするのは、如何なる理由に基づくかと考へていいか。私の觀るところに依れば、それは労働力の人間の構造に關する基礎的見解が全く欠けてゐることに歸因する、といつていいであらう。人間が精神と身體的存在であると考へるだけならば、それは寧ろ常識的な皮相な見解であるに過ぎない。吾々に取つて重要なことは、現實の労働力の行使に於いて、例へば、この精神と身體の機能が基本的にどのやうな關係を持ち、どのやうに統一されて現實の労働を可能にするか、またこの兩者は互に獨立に變化し得るものであるか、そして若しさうだとすればこの場合には、兩者の統一形態は何如に變化するか等を知ることである。しかもまた人間が社會的な存在であるとすれば、社會的な環境、更らに一般的にいつて、生活環境との關係に於いて、精神と身體的統一としての労働力がどのやうに變化するか、更らに一定の生活環境、特にまた生活環境の變化に對して、それがどのやうに反應するかを明かにすることが必要である。いひ換へれば、精神と身體の主體的條件の有機的關係が、先づその基本的構造に於いて、更らにこれがまた生活環境との關係に於いて理論的に考究されることに依つて、労働力の構造に關する基礎的理論が確立される。この基礎的理論を欠いては、労働科學は未だ確然たる學問的形態を與へられず、従つてまたその労働生産性増大の諸方策も充分の意義を附與され得ない。しかしこのことを直ちにウングァーリッヒの所論に望むことは、寧ろ望む方が無理である。蓋し今日の労働科學でも未だ

充分にこの點を科學的に解決し得てゐるとはいへない状態にあるからである。其處で次ぎのやうに考へることが、彼女の所論を最も適當に評價することとなるであらう。即ち、彼女以前の論者、特に例へば、ゴールドシャイドにあつては、人間が全體的、統一的な存在として考へられねばならぬことが、充分自覺されてゐたにも拘らず、彼女は單純に人間に對して精神と肉體の二面的考察を加へてゐる。其處で吾々の問題としては、彼女のこの考へ方を先きの基礎的な考へ方に引き戻すことが必要であるが、少くとも彼女の見解は、吾々に對してこのやうな問題提起を暗示するものとして、評價されてもいいであらう。

労働力の基礎的構造理論に對しては、ウングァーリッヒと時を同じくして、労働科學を説くに至つたリップマンが、總て幾分この點に觸れてはゐるが、それは未だ充分のものではなく、今日の吾々に取つては、この點に關する彼の見解を更らに全面的に押し進めることに依つて、労働科學の、従つてまたそれに基づく労働生産性増大のための労働者政策の發展を期待し得る譯けである(註二一)。

最後に、私は今一つの點に於いて、ウングァーリッヒの見解を含めて、一般に生産的社會政策論を、労働科學、特に從來の諸見解中最も優れたものとして、リップマンの労働科學に對照して考へて見たいと思ふ。労働科學はむろん吾々の經濟生活に於ける生産の實際上の要求から生れ、また事實生産に關する實際上の諸問題に關聯してゐる。しかもリップマンに従へば、労働科學は決して價值判断を行ふものではないと考へられてゐる。この労働科學の中立性の主張は、精神技術學に對するミュンスタトベルクと同様の中立性の主張の例に倣ふものであると見ていい。そしてこのやうな主張をしてゐるにも拘らず、リップマンは社會政策的立場から、労働の合理化問題に對して、労働科學に次ぎのやうな問題を自ら與へてゐる(註二二)。即ち

(一) 労働者の立場から見れば、労働の最適なる形成は如何なるものであるか。

(二) 経営の如何なる合理化方策が、直ちに労働者の利益となり、若しくは少くとも労働者の利益を害しはしないか。

(三) 経営上の如何なる方策が労働者の利益を害するか。この障害を避けるためには、この場合に如何なる對策が適當のものであるか。

此處にリップマンが労働者の立場といひ、また労働者の利益云々と述べて、問題を提出してゐることは、從來の資本主義的生産の下に於ける労働の最適化といふ意味に解するとすれば、それは労働の合理化の、即ち、労働生産性の増大の問題提起であると見られ得る。しかし吾々の立場から見れば、労働科學は本來生産の要請から生れたものであり、従つてその總ての問題は、労働生産性の増大といふ方面に於いて、取り擧げられねばならないのはむしろであつて、今更ら彼のやうに社會政策的問題を労働科學に附與することは、愚の至りであるといつていい。それは彼が労働科學の歴史的資格を充分理解し得ないことの結果ではあるが、それにしても彼が、労働科學の中立性といふ彼の論理からいへば、一見矛盾するやうに思へる社會政策的問題を重要なものとして擧げてゐるのは、労働科學の性格を彼自ら蔽ひ得なかつた證據とも考へられるであらう。このやうな彼の見解に對して、労働科學を以つて労働の合理化、最適化、労働生産性の増大のための科學であるといふ、労働科學の歴史的資格を最も明瞭に教へるものが、生産的社會政策論であることを知る必要があらう。そしてこの點の理解に關して、本論が讀者に對して多少とも接ける所があれば、本論に於ける私の最も大きな目的は果されてゐる。

(註一七) Produktivität, S. 343.

(註一八) Vgl. F. Giese, Philosophie der Arbeit, 1932, S. 97.

(註一九) Vgl. F. Wunderlich, Hugo Münsterbergs Bedeutung für die Nationalökonomie, 1920.

(註二〇) Ebenda, S. 74-75.

(註二一) 拙稿 労働者政策の基本問題 本誌 第三十四卷 第十號 參考

(註二二) Lipmann, Lehrbuch der Arbeitswissenschaft, 1932, S. 411 u. 413.

(昭和十六年四月十五日稿了)